

# 古代ギリシアのオイコノミコス ―異他性と共同性の緊張―

慶應義塾大学 文学部教授

納富信留

## <要旨>

古代ギリシア哲学から「異文化／経営」の理念を分析し、その意義を論じる。まず、「異文化」とは、社会や文化によって異なる価値観を認識し尊重することであるが、その「異他性」認識には、すでに人間である限り共通する「普遍性」が前提されている。古代ギリシア哲学は「異他性・普遍性」を対で認める構造を明らかにした。次に、「経営」の原語「オイコノミコス」は「家」を営むこと（家政）にあたる。夫妻・親子が基本をなす「家」は、人間が共に善く生きる「政治」の最小単位であり、クセノフォンやアリストテレスはその構造を分析した。他方、プラトンは「ポリス」全体が家族のようにあるべきとして、結婚や血縁に基づく家族制度を崩す過激な提案を行なっている。それは「家」が自明なものではなく、「共同性」を形作る緊張のうちにあることを示す。「異他性・普遍性・共同性」を追求する「異文化経営」理念は、人間として共により善く生きる可能性の実現を意味する。

## <キーワード>

古代ギリシア オイコノミコス 家政 異他性 共同性

### 1. 「異文化／経営」への視座

「異文化経営」とは、そもそも何を意味するのか？ 私の専門である古代ギリシア哲学において、この問いを原理的に考察してみたい。「原理的に」と言うのは、異文化経営の現場に関わる具体的な提言というより、まず「異文化／経営」を二つの側面に離した上で、哲学・歴史の視点からそれぞれを分析し、「異文化経営」という理念において両者が結合する意味を考察することである。

「異文化」という主題に、私の研究は二重の仕方に関わっている。まず、ヘロドトスの『歴史』を代表として、「異文化」への視野が古代ギリシアの学問探求において開かれ、それが西洋文明における異文化研究の出発点となった。人間が人間である限りで共通する自然本性（フュシス）と、社会や民族や文化によって異なる法・慣習（ノモス）との相違・対立は、古代ギリシアにおいて強く認識され、大きな論争の的となっていた。また、この研究が対象とする紀元

前のギリシア世界は、21世紀の日本からみてそもそも「異文化」である。このことは、必然的に研究そのものに「異文化とは何か？」という問いを突きつける。そのような「異文化」の哲学的な主題化を、第2節で検討する。

「経営」にあたる「オイコノモス」という語は、やはり古代ギリシアに起源を持つ。この語は、「農園経営・ポリス経営・植民地経営」といった場面で用いられ（主に歴史学の主題）、ギリシア哲学では、「ポリスの運営の技術」としての「政治術」という文脈の中、人々がどのように共同性を実現するか、という問題として論じられた。本論考では、「オイコノモス」（家政論）で、クセノフォン、アリストテレス、プラトンが「家」の経営をどう扱ったかを、第3節で検討していく。

このように、「異文化／経営」の意味を分析的に考察することで明らかになるのは、異他性と共同性をめぐる緊張が成立させる「人間」のあり方である。そこに、両者から成り立つ「異文化経営」の真の意義が見出されることが期待される。

## 2. 文化の異質性の探求

最初に、「古代ギリシア哲学」とは何か、から見ていく。紀元前6世紀初めに、ギリシア人の住むイオニア地方（小アジア半島西岸とエーゲ海東部）で、宇宙や人間やあらゆる事象の「始まり・原理」（アルケー）を「探求」（ヒストリア）する新たな知的潮流が起った。それはその後の西洋文明の「自然科学」の出発点となり、前5世紀後半から前4世紀の古典期アテナイでは、ソクラテス、プラトン、アリストテレスを中心に包括的な知的営為としての「哲学」（フィロソフィア）が、その基盤の上に成立した。彼らの思索・研究は、単に現在においても有益な内容を持っているだけでなく、西洋の学問・文化・社会・教育の礎として、現代日本に至るまで決定的な影響を及ぼしている。現在大学で教えられる「学問」の枠組み・方法、用いられる概念や問題は、古代ギリシアで出現したものが伝統をへてほぼそのまま展開されていると言ってよい<sup>1)</sup>。

古代文明においては周縁部にあった「ギリシア」という特殊環境で成立した「哲学・学問」は、その特殊性において「普遍性」（universality）を見る営みであった。例えば、ギリシア語という一つの言語において「合理性・論理性」が徹底的に追求され、その言語・思考（ロゴス）に与る者が「理性（ロゴス）を持つ」という意味で真の人間と見なされた。ギリシア語を解する者を意味する「ヘレネス」という語は「文明人」を指すようになり、ギリシア語を解さない「バルバロイ」すなわち「野蛮人」と対比された。古代ギリシアに由来するこの対比は、現代では文化的偏見としてしばしば批判的のともなっているが、それを優越的偏見へと歪めたのは後の

「ヨーロッパ」であり、古代ギリシアにおいて「理性＝言葉」（ロゴス）は、常に文化の異質性に向けて開かれていた。エジプトやフェニキアやペルシアといった先進地域と絶えず交流を持っていた古代ギリシアの知識人たちは、多言語をあやつる文化人であったと推定されるからである。

イオニアで成立した「探求」の流れを汲むヘロドトス（ca. 485-420 BC）は、ペルシア戦争の原因を探る『歴史』（ヒストリアイ）において、自らが旅行して調査したり、他者から伝え聞いたりした様々な文化や風習を紹介しており、現代の文化人類学の先駆けとなっている<sup>2)</sup>。葬送儀礼や宗教儀式、婚姻や家族制度は、民族や文化によって大いに異なる。それに相即して倫理規範や社会の価値観も多様である。ギリシア人は、自文化の周りですでにそのような多様性を経験していた。自分たちの理解を越えた生活習慣・異質な見方に出会うことで、自分たちがそれまで「自明」と見なしていた基準や考え方を見直し、むしろそれを「特殊」と見なす視座において、「普遍性」への眼差しが生まれる。ここが、ギリシアの「探求」の基本であった。

ヘロドトスの多元的なものの見方は、多様な価値観を許す民主政（デモクラティア）のアテナイの知的環境に親近性があった。そこでは、多様なものの見方のせめぎ合いと融合の中で、新たな思索が生産されていた。「異なる」ものをめぐる言葉（ロゴス）の営みが、ダイナミックな世界の把握、世界への働きかけを促していたのである。前5世紀半ばのアテナイは、ペリクレスの治下で政治的・文化的繁栄を迎えており、プロタゴラスやソクラテスやエウリピデスやアリストファネスらが活躍していた。小アジア半島南西の都市ハリカルナッソス出身のヘロドトスも、この時代にアテナイに滞在してその文化の影響を強く受けていたと考えられている。

重要な点は、単に古代ギリシア人がこのような多様な文化の諸事実を見知っていたということではなく、その「多様性／異他性」を探求の主題とし、そこにダイナミックに「普遍性」を見出そうとしていた点にある。つまり、ただ多くの異なった事例に関心を持ちそれを蒐集するだけでは雑学やトリヴィアに過ぎないが、そこにどのような異質性があり、それら「異他性」をどう理解すべきか、そもそもそれは理解可能か不可能か、を徹底的に探求する哲学が行なわれていたのである。

前5世紀後半を代表する知識人、ソフィスト・プロタゴラス（ca. 490-415 BC）は、有名な「人間尺度説」を著作『真理』の冒頭で表明し、多くの論争を生み出した<sup>3)</sup>。

「人間は万物の尺度である。あるものについては、あることの。ないものについては、ないことの。」（『真理』の伝承断片：DK 80B1）

この極めて一般的な形で表現された命題は、多様に解釈されうるが、「人間」をひとつの社会集団と考えると、社会や民族ごとに価値や規範やものの見方が定まっているが、それは相対的かつ多元的であるという意味に理解される。価値規範の相異を例にしよう。ある共同体においては、被害を被ったらそれと同等の報復を加えることが正義である。例えば、有名なハムラビ法典の「目には目を、歯には歯を」や、日本の封建時代の「仇討ち」は、被害者側の報復を是認し、「正義」として推奨さえしていた。だが、別の共同体や価値基準においては、どのような場合でも相手に同等の仕返しをすることは許されない。ソクラテスは「どのような不正にも悪で報いてはならない」として従容として死刑を受け入れ、イエス・キリストは「右の頬を打たれたら左の頬を出せ」という倫理を打ち出した。現代では、どのような悪事をなした者であっても、人間の生命は尊厳でありそれを他者が奪うことができない、という「死刑廃止論」もある。プロタゴラスの人間尺度説は、そのような多様な価値判断をそのまま受容し許容する方向での、理論的基礎を意図していた。

しかし、この多元的相対主義は、外部との接触によってしばしば危機に立たされる。例えば共同体の内部で価値判断をめぐる対立がある場合（「死刑廃止」をめぐる論争）、あるいは、異なる文化や共同体が衝突する場合（国際紛争、市場開放をめぐる対立、グローバルな問題）、あるいは、越境によって問題が発生する場合（旅行者による犯罪、治外法権）に、相対主義はどのように仲裁、解決するかを示さない。それゆえ、多くの場合は、多数決や政治権力といった「力」による決着が図られることになり、「多元的価値の認容」は、寛容や対話を欠く状況では暴力と紙一重となる。その緊張は、プロタゴラス自身の「人間尺度説」を批判する哲学の側の議論（プラトン、アリストテレス）において、いわば理論上の問題として提示される。つまり、「それぞれの人／共同体にそう思われれば、そうありもする」という彼の相対主義テーゼは、それ自体が絶対的で普遍的な規範となって「多元性／異他性」を回収してしまうのではないか。そうでなければ、互いに異なるという認識すら持てないままに、一切の共通基盤を欠いた「共約不可能性・翻訳不可能性」をもたらすのではないか。このような問題点が古代の哲学者たちによってすでに指摘されていた。現代哲学でも「相対主義」の可能性が重要な問題となっている<sup>4)</sup>。

寛容で鷹揚に見えるプロタゴラスの多元的相対主義が、強権主義（帝国主義）と裏腹であることは、彼が理論アドバイザーとなったアテナイの指導者ペリクレスが、国内では民主政を代表する政治家であったが、対外的にはペロポネソス戦争を開戦して全ギリシアの覇権を求めたという両義性にも相即する。「異他性・異文化」との関わりは、常にこういった緊張を内的に孕んだダイナミックなものであった。「そのまま認めて尊重しましょう」とすることも、「無視し

ましよう」とすることも、共にできない。古代ギリシアにおいて「異他性」とは、積極的に認めようとする時点で必ず理論的な対立や問題を引き起こす、根本的な問題概念であった。

プロタゴラスを批判する中で、プラトンやアリストテレスは、この「異他性」を認識することが、その認識を可能にする共通の基盤、すなわち「普遍性」を前提していることを示した。「異他性」とは「普遍性」と対をなす概念なのである。哲学とは、「普遍性」を追求することで、異他性との緊張において、むしろ多元性や相対性の認識を可能にする営みなのである。

さて、このように古代ギリシアを対象とする「古典学」(クラシックス)の研究も、私たちが生きる社会と文化から距離をおいて対象を見る「異文化」の認識である。時間と空間、そして言語や文化背景が大きく隔たった相手と、時に違和感をもって接することは、異他性の認識をつうじて、それを可能にする普遍性の視座に私たちを立たせてくれる。古代ギリシアを研究する古典学とは、そのような学問なのである。

### 3. 「オイコノミコス／ポリティコス」への関心

では、「異文化経営」のもう一つの要素である「経営」という理念が、古代ギリシアにおいてどう扱われたかを考察しよう。

ギリシア語で「経営する」にあたる動詞「オイケオー」(οἰκέω)は、「家、オイコス」(οἶκος)に由来し、「inhabit, colonize, settle in, manage, direct a household or a state, govern : 居住する、植民する、家や国家を治める、支配する」といった意味を持つ。そこから作られた名詞「オイコノミア」(οἰκονομία: management of a household or family, husbandry, administration, arrangement)が、今日の「経済」economy の原語となっている。これらの概念は、前4世紀のプラトン、クセノフォン、アリストテレスらによって取り上げられ、「家政論」(オイコノミコス、Οἰκονομικός)という著作が、クセノフォンに残されている。前1世紀に編集された「アリストテレス著作集」に収められた『経済学』(オイコノミコス)という小著は、後のアリストテレス学派の誰かがアリストテレスの『政治学』やクセノフォンを用いて書いた著作と見なされている。

これらの著作が書かれた背景には、前5世紀から盛んになった「政治」(ポリティカ)への関心、とりわけ市民として立派な者となるための「教育」をめぐる議論がある。プロタゴラスは、多くの有為な若者たちを集めて「人間の教育／徳の教育」を施した。彼が標榜していたのは、次のような内容であった。

「私から学ぶのは、家内のことについて、自分の家を最善に斉めるため、ポリスの事柄については、ポリスのことを行ったり語ったりするのに最も能力あるための、よき考慮である。」(プ

儒家に「修身齊家治國平天下」という標語がある。まさにそれ相当するプロタゴラスのこの教育内容は、「政治の技術」(ポリティケー・テクネー)と呼ばれる。プロタゴラスが教えると公言していた「徳」(アレテー)とは、それぞれの存在がそのあり方を最大限に発揮した活動状態、つまり「卓越性／善さ」のことである。例えば「馬の徳」は早く走ること、「桜の徳」は美しい花を咲かせて立派なサクラノボの実をつけることである。では「人間の徳」とは何か。プロタゴラスらソフィストは、それは、政治という「男子」の仕事において適切な考慮をなし、臨機応変に状況判断する知恵であり、それをもたらす説得の能力が「弁論術」(レートリケー)である、と主張した。

アテナイ市民(成年男子)の主要関心事は、「政治」(ポリスの事柄)にあったが、その基礎をなすのが、家を管理する「家政」(家の事柄)であった。アリストテレス(384-322 BC)は『政治学』第1巻で、「家」を人間の共同体の最小単位とし、そこから「村」そして「ポリス=国」が構成されることを論じている。人間は個々人では生きることができない。男性と女性が対となって子孫を残していくことが「自然的存在」としての人間生活の基本であり、また、主人と従者(奴隷)という縦の対で仕事の分担を行うこと、この二つの対によって「家」という最小限の共同性が成立する。だが、一つの家だけで人間に必要な全活動(生産、防衛等)を賄うことはできず、それらが寄り集まった「村」、そして更に村が集まって構成される「ポリス」において、はじめて人間は「自足」に至る。自足した共同体は、そこで人間の善さ、つまり理性に基づいて人間本来の活動する「幸福」(エウダイモニア)が実現可能となる場である。「家」は基礎的な単位であるが、それ自体では幸福を十全には実現できない。

人間の幸福とは、善き人間として活動する(生きる)ことであり、政治はそのような活動を共同体において実現するために施策を行い、教育を行うことであった。『政治学』に冒頭部にはこうある。

「明らかに、すべての共同体は何らかの善を目標にするのであるが、それらのうちでも最高の共同体、すべてを包括する共同体は、あらゆる善のうち最高の善のために、最大の努力をもってそれを目指す。これが国家(ポリス)と呼ばれるもの、すなわち国家共同体に他ならない。」(『政治学』第1巻1章)

人間は「共同体」を構成して生きる存在である。動物学者でもあったアリストテレスは、人

類をこう位置づける。ハトやハクチョウやカツオなど「群集性」を持つ生き物の中で、全員がまとまって共通の仕事をする「社会性」(共同性)を備えたものに、ミツバチ、アリ、ツルがいる。ヒトはその中でも社会性と単独性の両方を兼ね備えており(『動物誌』第1巻1章)、その基盤は「言葉」の使用、すなわち「理性(ロゴス)を持つこと」にあることと考えた(『政治学』第1巻2章)。

人間の共通善を実現する「政治」の基盤には、無論それを物質的に支える生産や交易の営み、つまり経済活動があるが、それらはそれ自体では目的にはならず、幸福の必要条件でしかない<sup>5)</sup>。また、政治の権力は、それによって公共の善さを実現する方途にすぎず、政治家とは全体の幸福を実現する役割を担う市民である。人間共同体の目的である幸福(エウダイモニア)とは、人間のあり方・状態の善さにある。幸福とは、個々人が状況において「幸せだ」と感じる主観的感情のことではなく<sup>6)</sup>、まして経済的な「豊かさ」のこともない。哲学や文化がそういった幸福の頂点に位置するのは、人間の本質が「知的活動」に存するからである。

「オイノミコス」(家政論)は、一家をどう営むか、家業(農園)をどう経営するか、経済活動をどう運営するか、といった、どの社会でも必要な人間の営為について論じる。クセノフォン(ca. 427-355 BC)は『家政論』を著し、ソクラテスとクリトブロスの対話という枠組みの中で、農業経営と家庭管理(主に妻の扱い)が論じている。これは、家の営みが、人の監督と財産の管理で成り立つことによる。これは、伝アリストテレス『経済学』1巻2章でも共通する。だがそれは、単なるノウハウではない、根本的な意味の確認とその実現を考える学問であった。それは、結局、人間とは何か、幸福はどう実現されるか、を徹底的に考えることに存する。クセノフォンはソクラテスの弟子の一人として、師ソクラテスを登場させる対話篇形式において、独自の倫理学思索を展開させた。彼は「家=農園/家庭」の運営を人間の善き生き方・倫理の基本に据えようとしたのである。

オイノミコスの対象である「家」は、アリストテレス『政治学』が明瞭に規定するように社会的共同体の最小単位であり、それは三つの側面を持つ。第一に「家族・家庭」という構成員の集団という意味、第二に「家財」という家や土地や生産手段や財産など物質面、第三に「家系」(日本の「家を継ぐ」のような)歴史的意味も担った。アリストテレスは「家」を構成する三つの人間関係に応じて「主人術/婚姻術/子孫作り術」があるとし、さらに「財産獲得術」(今日の経済学を含む)を加えて、「家政術」を規定している(『政治学』第1巻3章)。「家」とは、動物も持つような自然的な構成単位であると同時に、人間ならではの社会性も備える。それは、生まれながらに共同の生活に組み込まれているという自然性(同質性)と、結婚や契約によって結ばれる社会関係(他者性)とが結び合わされて成立している。

家の基本は、男性と女性の対である。これが、人間が自然的存在として持つ基本の共同性であり、そこに子孫が生まれ親と子という対が生じる。両親と子供は自然的で切れない関係であるが、家の基本となる夫婦は、他人同士の間で任意に結ばれる社会的関係である。夫と妻は婚姻に先立っては別の家に属する他人であり、もし婚姻を解消した場合には再び他人に戻る。主人と従者という関係も同様に社会的である。「家」というもつとも親近的な共同性は、他者の異他性を取り込むことで成立している。家族の個々人は、一家のメンバーとして果たす役割と存在意義において、全員が一つの目的に向かって生活を営む共同体をなす。他方で、その一人一人は家の外では別の集団にも属して（職場、学校、地域社会、国家など）、家はそういった多層的な関係の基盤となる最小の単位なのである。「家」が他の共同体と異なり、自然的で基本的な単位となるのは、その本質性にある。そこでは、例えば「営利」という経済的目標を持って集まる企業や、「奉仕」という社会的目標を持つボランティアグループのような特定の（限定された）目標ではなく、人間としての生存と存続（子孫を残す）、そして人間的な幸福の実現という生の全体的な目的のために共同体が営まれる。それゆえ「家」は他の様々な共同体より身近であり、永続的なものである。家は、自足できないという意味では「ポリス」よりも重要ではないが、そこで各メンバーが自己の生き方を実現するという意味で、「幸福」を実現するための基本的な場である。「家」こそは、原初的な共同性と基本的な異他性が結び合わされて成り立つ人間のあり方であった。アリストテレスは、人間の共同体としては「ポリス」が最も完全なものであると見なしながら、基本単位としての「家政術」を『政治学』第1巻でじっくりと考察していた。

「家」を基本単位とする「家政術」を政治の基本におく方向で議論したのは、クセノフォンやアリストテレスであったが、プラトン（427-347 BC）は主著『ポリテア』（国家）の理想国家論で、反対に「家族」の役割を最小限にする議論を展開している。そこには、「共同性」（コイノーニア）をめぐる考え方の対立がある。

プラトンは『ポリテア』で「正義」を論じるにあたり、人間の「国家」がどのように発生するかを、いわば思考実験的に描いている（第2～5巻）。そこでは、「共同性」に必要な「衣食住」の三つに合わせて「織物工／農夫／大工」の三名から社会組織が構成され、人間は生活の必要性・必然性から共同体を拡張していく様が論述される。アリストテレスが「共同体」の基本に「家」をおいたのとは対照的である。だが、当初は必要なものだけで構成されていた共同体が、いつしか贅沢によって膨れ上がっていく。必要な欲望を満たすことと、不必要な欲望を煽ることが、混同されていく過程で不正が生じ、理想の国家形態が墮落していくと考えたのである。「欲望の拡張」に不正や害悪の根源を見る視点は、魂における欲望や社会における欲望（そ



れは「金銭欲」に代表される)をどのように理性が制御していくか、つまり内的コントロールの理論を導いていく。

プラトンは理想の共同体に、あたかも有機体のように、どの一部も全体を表すような一体性を求めた(第5巻)。私たちは手をぶたれた時に「私がぶたれた」と考えて、「手がぶたれた」とは考えない。国家も本来そのように、メンバーが共同体全体で起こることを「自分の」と見なすべきである。これは、当時のギリシアが深刻な内部の対立や分裂(スタシス)から生じる戦乱の中にあつたことへの、根本的な改善案であつた。トゥキュディデスが『歴史』で冷静にペロポネソス戦争を分析したように、プラトンは、ギリシアのポリス同士での「内戦」、そしてポリス内部での「分裂」こそが諸悪の根源であると考えた。ペロポネソス戦争の苦い経験から、不正の源は外部にいる敵(例えばペルシア帝国)ではなく、内部の分裂にあると考えたのである。逆に共同体が完全に「一体」となつて対応する時、どのような外敵もそれを壊すことは難しい、それが善き国家であると主張している。

役割を異にするポリスの社会階層が、各々に相応しい仕事を為しながら、その全体の態勢に対して合意(ホモノイア)を持つ。これが一性として「正義」を実現する理想の国家であつた(第4巻)。そこで共同体の全体を配慮し、適切に統括するのが指導者としての政治家の役割であり、それは理性の働きであつた。これが「哲人統治論」の提唱の意図である(第5～7巻)。

そのようなプラトンの政治理念にとって、「家族」の役割はできるだけ小さい方がよい。「指導者/軍人/生産者」という三階層の共同体において、農民や職人や商人のような生産者は通常の家族を営むように想定されているが、公共の仕事・政治に責任を持つべく選別され教育された支配層(指導者・軍人)には、家族の絆を断ち、私有財産を一切持たないという条件が課された。特定のペアを組まずに、男性と女性が適宜組み合わせられる「妻子共有論」は、子供も共同体のものとして養育することで、特定の愛着(家族愛)を断ち切ろうとする(第5巻)。ポリスのメンバーは皆家族のようなものである。その一部、例えば特定の女性や特定の子供に「自分の妻・子」という固着をもつことは、ポリスという共同体の内部における分離独立、さらに私利私欲にもとづく公共性への離反を含意する。そういった私的な愛着の源が「家族」であり私有財産であり、総じて「家」であつた。プラトンは支配者においてその「家」を解体しなければ、「ポリス」において真の意味で一体である共同体は成立しない、と考えていた。

プラトンの考える一体性とは、異他性を消し去る悪しき統一性であるという批判を、弟子アリストテレスは『政治学』第2巻で展開する。多様性をそのまま活かす形での共同性が必要なのであり、それを損なうプラトンの共同体は専制的な独裁国家に陥りかねない。アリストテレスはむしろ、夫婦や子供への愛情、つまり「家」こそが社会的絆の基本であり、私有財産への

思い入れが経済活動を促進して、その結果ポリス全体の利益につながると考えた。

アリストテレスによる批判は、20世紀に「全体主義」の問題（ナチズム、スターリニズム）の問題としてプラトンに向けられた批判—カール・ポパー、エリック・ハヴロック、アイザイア・バーリンら—を先取りしている。共同の善を実現するために「統一性」を優先すると、人間の社会が持つ活性や自由を抑圧して、結果として統一性を破壊する。異他性を協和させる共同性がここで求められている。共同体（社会）とは何か。それは「他者」を内に持つ「家」という人間社会のあり方から、反省されなければならない。

#### 4. 共同性と他者

それでは、その「共同性／異他性」は、どのように認識され調停されるのか。古代ギリシア人は、「言葉」により社会や人間生活のあり方や目標を語り認識していく「哲学」（フィロソフィア）探求と、言論を用いて他者を説得し合意を形成する「弁論術」（レートリケー）にそれを求めた。言論の力は政治において他者を支配し操るという危険な側面も有しており、それがソフィストらの「弁論術」が厳しく批判される原因ともなったが、異質なものを共通性にもたらず「経営」は、言論の力なくしてはなし得ない。言論が対等の関係で交わされる場合に、それは「対話」（ディアロゴス）となるが、これは、理想として安易に語られるような最善のもでも容易なものでもない。対話は、共感や合意を生むこともあれば、そこに埋められない溝や相違を明らかにすることで、争いや対立を顕在化させることもある。哲学者ソクラテスは人々と対話を交わし、言論によって社会通念を批判することで、晩年の裁判と刑死に至った。そのような対話の緊張と可能性が、共同性の基本にある<sup>7)</sup>。

プラトンは、正しい対話の技術として「ディアレクティケー」を構想したが、その理論的基礎には「同一性／異他性」の連関という論理がある。では、ディアレクティケーが基本とする「異他性」について、プラトン後期思想が示唆する哲学的考察を整理しよう。

(1) 「異なっている」（差異）とは「同じ」（同一）との対においてある。「異なる」と言うためには、異なる2者それぞれの自己同一性が基盤となるからである。逆に、自己同一性は、「異なる」ことの認識において確保される。

(2) 次に、「異なる」は「～でない」という形、すなわち否定をとる。否定としての「異なる」は、「～とは（異なる）」(different from)という分離において、他者との関係で意味規定がなされる。つまり、何を否定したか、何から異なるか、が限定されない限り、異他性は成立しない。

(3) 「異なる」と言う場合にその否定を肯定に翻訳すると、実質は多様となる。「赤でない＝赤と異なる」ことは、「黄色である」を意味するかもしれないが、同等に「緑である／白である」

であるかもしれない。「大きくない」は「小さい」を意味するばかりでなく、「等しい」も含む。

(4) 否定の否定(二重否定)を単純に「肯定」ととってはならない。いつもマイナスのマイナスがプラスになるように、二重の否定が元に戻る訳ではない。この基本的な誤解が、しばしば重要な誤謬をもたらす。「敵の敵は味方」という論理は、かつてソ連に反対したチャウチェクやイランに対抗したサダム・フセインを援助したアメリカのように、大きな誤解を生む。「赤でない」が「黄色である」という場合を指し、その否定「黄色でない」が「緑である」を指す場合を考えよう。「緑」と「赤」は異他の関係のままである。

(5) また、ある2者を異なるとする場合は、それぞれが同レベルで「類」をなすことが必要である。プラトンは『政治家(ポリティコス)』で、「ギリシア人/バルバロイ」という区別が、論理的に「分割」にならないことを示している。「非ギリシア人」には「エジプト人、スキタイ人、エトルリア人」さらには「インド人、中国人、日本人」といった限りない多様な人々が含まれる以上、それは「バルバロイ」という名で呼ばれようとも、一つの類を成してはいない。「類」を成さないものを比較の対象と見なす誤謬は、日常のさまざまな場面で見られる。「日本人」を「外国人」と対比して論じる日本文化論もその典型である。例えば、「日本人は外国人より几帳面である」という言説は、「日本人は、アメリカ人より、中国人より、インド人より...、几帳面である」という個別命題の総体であろうが、もし「日本人より韓国人が几帳面である」というケースが成り立っていれば、「外国人は日本人より几帳面である」という命題もまた真になる。ここでは「外国人」という語が不特定であるがゆえに多義的に用いられおり、類を成さない対象を比較することで誤謬が発生している。同一性と差異を特定しながら、個別を考察する必要がここにある。無論、そこでは「日本人」という集団が本来の意味で一つの「類」を成すのかどうかも、慎重に検討されるべき課題である。それを省いた安易な「日本文化論」は、危険である。他方で、一切の「類」化を認めなければ「比較」も成り立たない。ある集合の間での多様性を意識しつつもそこに共通性を置くことが、「類」認識の出発点である。「類」の同一性の認識は、異他性を見極めることで可能になる。

(6) 否定は、それ自体では否定対象を特定せず、相異の距離や度合いを示さない。また、「異なる」のは観点に応じて成立するため、観点による相異の特定を慎重に求めていくことが「異なる」という把握なのである。「何が、何と、どの点で、どの位、どう異なるか」が、「異他」の理解には必要である。つまり、「異」をそう「同定」する試みが必要となる。そういった異他性について、複数の理解を織り上げ、了解し、同意していく作業が、それ自体として共同性や普遍性を形づくっていく言論の営み、すなわち哲学となるのである。「異なる」という原理は、そこから探求が始まる出発点として、哲学の基本にある。

古代ギリシアのオイコノモスは、「家」という人間社会の基本において「共同性／異他性」に注目し、人間世界を成り立たせる普遍的な原理を探求した。異文化へのアプローチとは、自分から遠く離れたエキゾチックなものに目を向けることばかりではなく、私たち自身の身近にあり、あるいは内部にある「異なるもの・他者」に目を向けることで可能になる。

これまで「異文化」と「経営」のそれぞれを古代ギリシア哲学の視点から分析してきたが、両者は、異なるものを統合することで新たな共通性に向かうという点で重なりあう理念である。「異文化経営」とは、その意味で、より本質的な仕方での他者との出会いであり、そこで普遍的な人間のあり方が目指される場であると言うことができよう。

#### <注>

1. 古代ギリシアにおいて「哲学」がどう成立したかについては、納富(2007)を参照。
2. ヘロドトスについては、近年新たな見直し作業も進んでいる。中務(2010)を参照。
3. プロタゴラスを始めとするソフィストの意義については、納富(2006b)、(2008)を参照。
4. メイランド・クラウス(1989)が、現代分析哲学から相対主義への賛否両論に、基本的な論点を提示している。
5. アリストテレスの政治・経済思想については、岩田(2010)を参照。
6. 「幸せ」を個々人の感情の表白、主観的なものとする近代の考え方とは異なる。
7. 対話としてのロゴスと「他者」の問題は、納富(2006a)を参照。

#### <参考文献>

- ヘロドトス『歴史』全3巻、松平千秋訳、岩波文庫、1971-72年
- プラトン『プロタゴラス』、藤沢令夫訳、岩波文庫、1988年
- プラトン『国家』全2巻、藤沢令夫訳、岩波文庫、1979年
- クセノフォン『オイコノモス一家政について』、越前谷悦子訳、リーベル出版、2010年
- Xenophon, *Oeconomicus*, ed. S. B. Pomeroy, Oxford, 1994
- アリストテレス『政治学』、牛田徳子訳、京都大学学術出版会、西洋古典叢書、2001年
- アリストテレス『経済学』、村川堅太郎訳、「アリストテレス全集」第15巻、岩波書店、1969年
- 岩田靖夫(2010)『アリストテレスの政治思想』、岩波書店、2010年
- 中務哲郎(2010)『ヘロドトス『歴史』—世界の均衡を描く』、岩波書店、2010年
- 納富信留(2006a)「他者との対話としての哲学」、三井善止編『他者のロゴスとパトス』、玉川大学出版部、

2006年

納富信留(2006b)『ソフィストとは誰か?』、人文書院、2006年

納富信留(2007)「哲学の成立—古代ギリシアから現代日本に向けて—」、『哲学』58号(日本哲学会編)、  
法政大学出版局、25-43頁、2007年

納富信留(2008)「ソフィスト思潮」『哲学の歴史1 哲学誕生【古代1】始まりとしてのギリシア』、中  
央公論新社、2008年

J. M. メイランド、M. クラウス編(1989)『相対主義の可能性』、常俊宗三郎他訳、産業図書、1989年